鳥取大学医学部保健学科検査技術科学専攻生体制御学講座

名誉教授 **浦上 克哉**（学29・昭58年卒）KATSUYA URAKAMI

鳥取大学医学部へ入学してから44年、教授就任から21年と長きにわたり本学で過ごし無事退任の日を迎えることができましたことを、同窓会の皆様にお礼申し上げたいと思います。

私は昭和52年４月に鳥取大学医学部医学科に入学し、昭和58年３月に卒業しました。その後、鳥取大学医学部脳神経内科に入局し、平成元年４月より鳥取大学脳神経内科助手、平成８年４月より同講師を歴任し、平成13年４月から保健学科生体制御学教授に就任しました。

教授就任以来、教育、診療、研究、地域貢献に取り組みました。学部教育では、学生からの授業評価が５点満点で最高値は4.82点を記録し、概ね4.5点以上でした。大学院教育においては、35名に修士号を、７名に博士号を取得させることができました。また、大学院に本邦初の認定認知症領域検査技師コースを作り、認知症予防学特論の講義・演習を行い10名を修了させることができました。

学会活動では、日本認知症予防学会代表理事をはじめ、日本老年精神医学会理事、日本老年学会理事、日本脳血管・認知症学会理事、日本化粧医療学会理事、日本神経学会代議員、日本老年医学会代議員、日本認知症学会代議員など数多くの学会の役職を務めました。全国規模の学会では平成23年には第１回日本認知症予防学会、平成28年には第５回日本認知症予防学会、平成30年には第９回日本脳血管・認知症学会、令和２年には日本老年精神医学会、令和３年には第10回日本認知症予防学会を開催し、それぞれ大会長としての責務を果たしました。

鳥取大学医学部附属病院と信生病院では認知症専門外来（もの忘れ外来）で数多くの認知症患者の診断、治療、ケア及び軽度認知障害（MCI）の認知症予防を続けてきました。鳥取県内のみならず全国各地から、さらに海外からの患者も診療させて頂きました。

研究面においては、認知症の研究を脳神経内科時代より行ってきましたが、そのことを保健学科でも継続し、さらに認知症予防の研究に取り組みました。成果としては一過性脳虚血発作の有病率、アルツハイマー病の発症に両親の出生時年齢が危険因子であることを初めて報告しました。アルツハイマー病の診断マーカーの研究ではアミロイドβ前駆体蛋白やリン酸化タウ蛋白の測定の有用性を報告しました。保健学科に移ってから認知症予防にアロマセラピーが有効であること、また鳥取県・日本財団との共同プロジェクト「とっとり方式認知症予防プログラムの開発研究とその普及」のまとめ役として大きな成果を出すことができました。認知症予防をとおした地域貢献が評価され令和３年度鳥取大学医学部地域貢献賞を受賞することができました。

知的財産の創出では物忘れ相談プログラム（特許第3515988号）、痴呆症診断装置及び痴呆症診断プログラム（特許第4171832号）、認知症予防システム（特許第6591763号）他多数の特許を取得しました。これらの特許の多くを商品化し、大学発ベンチャー企業ハイパーブレインの立ち上げと発展にも貢献しました。それらの取り組みが評価され、令和３年度鳥取大学医学部知的財産功労賞を受賞することができました。

認知症及び認知症予防の啓発活動にも尽力しました。テレビ・ラジオ出演や新聞、週刊誌への寄稿・取材、及び市民公開講座などの講演活動も多くこなしてきました。

2022年４月１日から鳥取大学医学部保健学科認知症予防学講座（寄附講座）の教授に就任しまし

た。本講座は“あったらいいな”を形にすることで有名な小林製薬株式会社の寄附によっております。認知症患者数が2025年には700万人を越えると推計されており、しっかりと認知症予防の教育、研究、地域貢献に取り組んでいかなければならないと考えております。外来診療も同様にさせて頂いておりますので、ご紹介頂ければと存じます。今後とも、何卒宜しくお願い致します。

鳥取大学研究推進機構研究戦略室

名誉教授　**難波 栄二**（学27・昭56年卒）EIJI NANBA

私は本年３月31日付で、鳥取大学研究推進機構を定年退職いたしました。本年４月からは、岡山県津山市にある医療法人晴顕会大谷病院でお世話になっています。また、鳥取大学研究推進機構の特任教授として、研究活動も引き続き続けています。

私は、1975年４月鳥取大学に入学し、卒業後は医学部脳幹性疾患研究施設脳神経小児科講座（現、脳神経医科学講座脳神経小児科）に入局しました。故竹下研三教授の指導の下、国立精神・神経センター（現国立精神神経医療研究センター：鈴木義之先生）に、その後米国ノースカロライナ大学（鈴木邦彦先生）にも研究留学させていただきました。卒業後10年間の半分以上を国内外の研究室で過ごした後、1991年に帰国し、すぐに脳神経小児科の医局長を拝命しました。その後1995年に遺伝子実験施設の助教授、2003年には学内改組にて生命機能研究支援センターの教授となりました。2009年から2017年までは生命機能研究支援センター長も拝命しました。その後、再び改組があり、退職時は研究推進機構研究戦略室の所属でした。一方、医学部附属病院では2007年から2017年まで遺伝子診療科の科長を担当し、その間、次世代高度医療研究センターの方にも関わらせていただきました。令和２年度設置の大学院医科学専攻博士前期課程では、高度臨床実践者（®認定遺伝カウンセラー）養成課程の設置にも尽力しました。また、学生時代に医学部漕艇部に所属していたことから、退職の１年前までは漕艇部顧問もやっていました。

在職中には医学部、医学部附属病院、全学の皆様、さらに同窓会の方々の温かいご指導やご支援をいただきましたことには、本当に感謝申し上げます。

私は小児科・小児神経科医でしたが、遺伝子実験施設に移った時から、小児科診療を行うことがなくなりました。もっぱら、遺伝子組換え実験の安全管理、遺伝子解析技術を使った研究活動、大学院生の指導をやっていました。本年度は研究の締めくくりとして、特任教授として週に一日大学を訪れ研究活動とともに、遺伝カウンセラーコースの学生さんの指導をやっています。また、全国的な活動として適正な新型出生前診断（NIPT）の実施ために日本医学会出生前検査認証精度等運営委員会が設置されましたが、その中の検査分析機関認証WG座長を担当しています。

このように退職までの30年間は小児科としての診療活動がなく、小児科と小児神経科の専門医はなくなりました。こちらの大谷病院の方では、内科医として１から勉強を始めたところです。大谷病院は46病床の療養型の病院で、私は30年ほど前から月に１回程度、土日の当直医をやっていました。この30年間で入院患者の平均年齢が30歳近く上昇し、患者さんの状況や医療が大きく変わった